

日本未来学会 第1回大会 一般発表 平成19年11月10日 於東京経済大学

【東洋発新代論の形成に向けて 総合的地歴観からの提唱】

松崎 昇（上武大学）

〔はじめに〕

人類はこれまで時空間的にさまざまな展開をなしてきたし、現在もなしているし、これからもなしていくであろう。地歴観とは、このような人類の時空間的な展開関係を、すなわち地歴的な展開の様相を、大局的に捉えんとするものである。⁽¹⁾

世に歴史観という概念はある。抽象的なかたちでは哲学・宗教等々による各種の議論・区分があろうが、歴史具体的な標準的モデルとしては、それは〈先史時代と歴史時代〉という大区分、および歴史時代に関する〈古代、中世、近代〉という中区分を基本とし、論者によってはこれになにがしか加減するような歴史区分図式としてであろう。これに対して私（達）は、そのような図式は概して近代を軽視しているのではないか、また未来たる近代後を視界から落としてしまっているのではないかと考えている。⁽²⁾

地理観という表現はあまりみかけないようであるが、それでもたとえば〈西洋と東洋〉の対比の是非等として、あるいは形式的には欧亜等における東西南北（中）区分として、また内容的にも自然・人文地理的な議論・区分をする際、事実上さまざまに想定活用されているのではないかと思われる。これに対して私達は、地理観を明示的に確立すべきではないか、またそこに南洋という基本概念を加えるべきではないかと考えている。⁽³⁾

以下において私達は、人類の地歴的な存在行動様式を、〈前代、近代、新代〉という歴史観、および〈南洋、西洋、東洋〉という地理観を合わせたところの、《南洋発前代、西洋発近代、東洋発新代》という総合的な地歴観において概把・提示したい。⁽⁴⁾

〔注〕

(1) 人類のこれまでの展開は、直接、地歴観として統体的に把捉するのが本筋である。しかしながら、本報告では、歴史観、地理観、地歴観として、敢えて分解・組立方式で叙述した。換言するならば、地歴観を、構成要素という観点で強いて分析すると歴史観と地理観とが現われてくる、という関係にある。だから歴史観と言いだ地理観と言っても、本来的に、既に分かちがたく他者を相互に含んでいることになる。

(2) 歴史観に関して、二点補足説明をしておきたい。

第一に、歴史観と歴史学との関係について。両者の関係は、理念的にはさしあたり、歴史観が歴史学を抽象的に先導し、歴史学が歴史観を具体的に修正する、そしてその修正された歴史観が歴史学をさらに修正先導し、云々といった順次規定的な相互関係として捉えられるのではないか。〈歴史観1 歴史学A 歴史観2 歴史学B...〉である。ただし、通例は、歴史学は歴史観を意識しないし、歴史観の方も常識的無自覚的な状態にあるものと思われる。ここではそれを自覚的に取り扱ってみようという次第である。（もっとも、主流派歴史学は、科学的実証性に憧れているものと思われる。その場合には、歴史観などというものは曖昧模糊とした独断に過ぎないとして、それを積極的に否定する関係にある。）

セッション2：歴史に学ぶ未来学

6.松崎昇氏資料

再言しよう。歴史学は、形式面の問題として、自己の歴史観をもっと明確に自覚提示しておくべきではないか。無限の歴史的事象を、一定の視座・基準なしに区分整序・取捨選択することはできない。必ず区分基準はある。そしてそれは明示されなければならない。また歴史観的な内容面の問題としては、直接的には対象外になるのかもしれないが、もっと先史時代を重視すべきであろう。とともに、もちろん、近代の最重要視も必要である。

第二に、歴史における現在および未来の取り扱いについて。歴史は、通例は、過去だけを扱うものとされる。対象としうるのは、なりうるのは、記述され、とりあえず確定されたものに限る、ということならば、確かにそのように相成ろう。しかしながら、人類の時間的歴史的展開は、過去に限定されているわけではないし、既に確定されているわけでもない。むしろ現在も続いているのであり、ということは未来においても続く可能性がきわめて高い。つまり、歴史は（認識論的には現在からの照射すなわち現在あるのみであるが、存在論的には）過去から現在を経て未来へ向かうものであると捉えるのが妥当である、ということになる。歴史把握における形式的三段階存在性である。だがこのような形式的論点のみならず、内容的にも、以下にみるように、私見によれば、現在たる近代は歴史的に隔絶した巨大な一段階をなす、しかも今後近代とは質的に異なる段階が訪れるであろうから近代後という一段階をさらに設定せざるをえない。これは近代をどう捉えるかという問題である。西洋発近代をゴールとするような西洋発近代肯定主義的な記述では、論理の筋道を捉え損なうのではないか。近代後についても、これまた直接的には対象外になるのかもしれないが、なんらかのかたちで視野に入れ言及すべきであろう。以上が、現在段階および未来段階を含むものとしての、歴史把握における内容的諸段階存在性である。現在形としての近代、および未来形としての近代後、をも捉える必要があるであろうと主張するゆえんである。

ちなみにわが国では、上山春平が〈自然社会、農業社会、工業社会〉という三段階区分説を提出した。この系の論者は多い。梅棹忠夫（平成11年）はそれに賛意を表明しつつ、〈情報社会〉を加えたいわば四段階区分を、村上泰亮は〈狩猟・採集社会、農耕・牧畜社会（前期・後期）、産業社会（前期・後期）〉という三（ないし五）段階区分を、富永健一も〈未開社会、農業社会（前期・後期）、近代産業社会（前期・後期）〉という三（ないし五）段階区分を説いた。

逆に切断面に注目するならば、伊東俊太郎は〈人類革命、農業革命、都市革命、精神革命、科学革命、環境革命〉という六革命説を提出した。またA.トフラーは〈農業革命、産業革命、いわば知識革命〉による三つの波を説いている。

ほかにたとえば川喜田二郎は〈素朴文化、垂文明or重層文化、文明〉という三段階二コース説を示した。

（3）地理観の具体的内実として、すなわち具体的な地理的区分としては、方位区分が基本となるのではないか。方位区分こそは形式的骨格をなすものであり、一切の内容はその上に盛り込まれることになる。すなわちそれは形式的には緯度経度的な地域的固有性をよく指示しえようし、内容的にも気候土壌植生動物相等による地域的分類性をよく体現しえよう。これに陸海性（大陸性と海洋性、ないし大陸国と半島国と島嶼国）や高低性（高地性と低地性）等、それ以外の自然環境的諸契機を加味していく必要もあろうし、さらには人種圏や宗教圏や民族圏や言語圏等、また経済圏や政治圏等の人文・社会的諸契機も重ね塗りしていく必要があろう。要するに、自然・人文地理学、地政学、国際関係論等を参照しつつ、人類の地理的展開における重層的な特性を総合的に考慮するところに、地理観ができあがる次第であろう。以上のうち、基底に最重要な契機となるのが、温湿度である。

セッション2：歴史に学ぶ未来学

6.松崎昇氏資料

ちなみに、わが国には和辻哲郎以来、鯖田豊之、梅棹忠夫(昭和49年)、鈴木秀夫、安田喜恵、川勝平太等々、優れた総合的地理観の系譜がある。おそらくは、かつて支那と長らく対峙し、その後西洋と厳しく対峙せざるをえなかった経験がものをいっているのであろう。

(4) ちなみに地歴観は、人類人間の類型区分を基底に見据えながら、考察されることになる。すなわち人類・人間は、<過去志向と現在志向>を筆頭として、各種の二律背反的な性向を併有する。「あれもこれも」である。ただし併含の比率・割合は、未熟成熟度によって異なるとともに、重心移動する。

なお本報告は、拙著(平成17年)、比較文明学会報告(「西洋発近代の卒業」平成8年11月、「総合的地歴観の提唱」平成14年11月)、日本社会学会報告(「総合的地歴観の提示」平成9年11月、「東洋発近代の形成に向けて」平成10年11月)などを踏まえている。

〔1. 歴史観について〕

歴史観の要諦は、二点ある。ひとつは、近代のものすごさを適切に秤量評価するにある。それは古代や中世などよりも上位の概念である。これと対等同格に釣り合う大区分は、採集狩猟・部族生活などを旨とする前代をおいてほかにない。もうひとつは、近代は終点ではありえないことを理解するにある。論理的に考えて、それをゴールとみなすわけにはいかない。[図1、2、表1]

(1) 前代(幼年期)

A. 抽象的特徴

まず前代は、過去の事例を参照するという指向性を第一義とした。<過去主義>の時代である。ここでは経験・慣習に頼る面が大きかった。前例・安定性を好み、古い・老女の智慧が尊ばれるわけである。(1)

そして对他者面では、社会を第一義とした。<社会主義>の時代である。ここでは人々は社会の成員すなわち社会人として現われた。まずは集団で生きるしかなかったわけである。(2)

さらに対自身面では、感情を第一義とした。<感性主義>である。

B. 具体的展開

前代は具体的には先史時代を典型とする。すなわち万年単位以前である。古代、中世などはその残型である。

その内実をみてみよう。前代は<始動期、展開期、終了期>に中区分される。前代の始動期(形成期、先代)は、およそ700万年前以降の人類の登場(および20万年前以降の現生人類の登場)を契機とする。直立二足歩行、道具作成、家族、会話、信仰等を基本的な特徴としよう。文化が始まるわけである。前代の展開期(典型期、原始時代)は、およそ(180万年前および)8万年前以降の、人類のユーラシア大陸への(進出・)再進出を契機とする。これにより人類は旧大陸全体ひいては全大陸に拡散し、住み分けることになった。現在につながる人種、民族、語族の成立等を基本的な特徴としよう。前代の終了期(解体期、上代)は、およそ1万年前以降の、定住農耕畜牧(ないし遊牧)の開始を契機とする。定住農牧に伴う高度文化や、都市・国家による文明等を基本的な特徴としよう。

このうち前代の終了期（解体期、上代）について、さらに考察しておこう。前代の終了期（上代）はさらに＜始代・古代・中世＞に小区分される。まず始代は定住農牧ないし遊牧という生業形態を主たる特徴とする。このうちの定住農牧こそは、労働、生産、余剰物、蓄積、人口増加といった、私たちにも馴染み深い一連の積極的基幹要素系の先駆をなしている。そして古代は、農牧社会文化圏と遊牧社会文化圏との接触・衝突によってもたらされたもので、都市国家ないし王国ないし帝国という集権的な社会形態を主たる特徴とする。社会的な分業・階層、また＜貨幣、法律、文字＞もこの期に登場する。始代世界のほぼ延長線上に現われ、諸民族諸国家諸文化の接触衝突興亡がさながら絵巻物のように展開する豪華絢爛な時代であり、人類史の一つのピークをなす。文明論の醍醐味を存分に発揮賞味しうる、圧巻の時期である。これに対して中世は宗教と政治との分離併存、ならびに政治面における中央と地方との分離併存という分権多元的な社会状況を主たる特徴とする。古代世界の辺境から、古代世界の強い影響を受けつつもそれを遮断するかたちで、新規に立ち現われた。欧日にのみ見られた現象であった（＜西欧中世＞および＜日本中世＞）。一寸地味にかがむがごとき時期であり、そのようなものとして近代世界を切り拓く跳躍台となった。すなわちこの中世こそが、近代をもたらしたのである。（³、⁴）

別の角度からみるならば、前代の終了期にあっては、自然生的な部族的社会が解体され、社会が幾度も幾度も新たに再編された。それ以前たる前代の展開期との関係では自然生的な社会が解体された点にポイントがあるが、それ以後たる近代との関係では直接的な諸社会がともかくにも再編維持された点にポイントがある。再編諸社会では、あくまでも農村が基盤であり、都市等は登場したとしても例外的な特異点であるにすぎない。いわば面と諸点、大洋と諸島の関係である。ここでは＜定住農牧・遊牧・商工金融業と村落・町街・都市・国家と宗教・哲学・思想＞が成立した。

（2）近代（青年期）

A．抽象的特徴

つぎに近代は、現在における利害を重視するという指向性を第一義とする。＜現在主義＞の時代である。ここでは能力・実力がもてはやされるようになった。革新性・創造性を好み、若さ・青年男性の力が尊ばれるわけである。

そして対他者面では、個人を第一義とする。＜個人主義＞の時代である。ここでは社会は二次的人為的な構成物として現われる。「俺が、俺が」の世界であり、家族すらうとうしいと感じるようになる。（⁵）

さらに対自身面では、知性を第一義とするようになる。＜理性主義＞の時代である。

B．具体的展開

近代は具体的にはおよそ16～23世紀にわたり、19～20世紀を典型とする。

その内実をみてみよう。近代も＜始動期、展開期、終了期＞に中区分される。近代の始動期（形成期）は、概ね16～18世紀における事態で、対外的には欧州勢の世界進出、対内的には私有権の成立を契機とし、＜資本、主権、理性＞という社会的

三主体の原始的蓄積を基本的な特徴とする。近代の展開期（典型期）は、概ね19～20世紀における事態で、対外的には欧州勢による世界支配、対内的には生産機構の確立を契機とし、社会的三主体の恒常的蓄積を基本的な特徴とする。近代の終了期（解体期）は、概ね21～23世紀における事態で、対外的には西洋勢による世界支配の動揺、対内的には内外の諸環境の劣化を契機とし、社会的三主体の累積的過剰を基本的な特徴としよう。（6、7）

このうち近代の展開期（典型期）はさらに＜経済主導型期、国家主導型期、意識主導型期＞に小区分される。

（3）新代（壮年期）

A．抽象的特徴

そして新代は、過去を参照し現在を踏まえつつも、未来を重視する。未来からの視座、ないし未来への視座を重視するわけであり、やや具体的に表現するならば子孫を大事にするわけである。

そして对他者面では、個々人を重視しつつ、社会的な調和にも十分配慮する。個人的社会＝社会的個人の時代であろう。ここでは各種の中間的「好縁」（堺屋太一（平成6年））的諸組織が、活発に活動するであろう。

さらに対自身面では、肚を中心として感性と理性を統合するような生き様死に様を旨とするであろう。

B．具体的展開

新代は具体的にはおよそ24世紀以降に現われるであろう。（8）

〔注〕

（1）末期になると、失った近過去を憧憬し、現在から未来を墮落退化への道とみなす見地も現れてくる。たとえば、支那の儒教による周代憧憬、インドの仏教（の一流派）による末法思想を顧省されたい。

（2）ここにいう社会主義とは、部族生活を第一義とするような人間の本然的な対他的集团的あり方を意味するのであって、近代におけるイデオロギーとしてのいわゆる社会主義・共産主義を意味するわけではない。

（3）西田正規は、定住という契機を重視している。定住農牧活動こそは、その後の一切の高度文化・文明の支持基盤である。

なお古代諸文明に関連して、たとえばマシュー・メルコは、文明圏の地理的な枚挙整理を行っている。

（4）ここで、人類の経過問題をみておこう。全人類、人種、民族が本歴史観でみるような経緯を辿ったというわけではない。それどころか、全経緯を辿ったのは日本民族だけであり、ヨーロッパ民族がかろうじてそれにつぐかといったところである。まずブラックアフリカの多くの民は、前代の始動期および展開期を経験したのみであった。ほかの相当数の民も前代の展開期どまりであった。要するに、移動採集狩猟、部族生活のままである。一定数の民が農耕牧畜の段階に進んだ。そのなかから少数の民が、都市・帝国形成に乗り出した。さらにその縁辺部から、その影響を強く受け、かつその影響から脱するかたちで、例外的にごくわずかの民が祭政分離の社会形成を行い、遂には近代（ないし近世）をも生み出した。ところがこの近代に入るや、他のすべての

セッション2：歴史に学ぶ未来学

6.松崎昇氏資料

民も、多かれ少なかれ、近代的な生活様式に巻き込まれるかたちで参入することになった。近代こそは、表面表層的ながら、すべての民をおしなべて巻き込んだのである。〔表2〕

以上は善し悪しではない。むしろ外的な自然・社会事情等に迫られて、漸次の少数派が、生きるためにやむをえず次の段階を編み出さざるをえなかったという側面が強いだらう。必要に迫られて、しょうがなしに苦肉の策を編み出し、新奇手に賭けたわけである。（ただし余裕があるので意欲的好奇的に新展開したという側面も少しはあるだろう。ともあれ）基本的には、必要がなければ、それぞれの原状現状にとどまったのであり、敢えてそれよりさきに歩み出る必要はなかったのである。この「敢えてそれよりさきに歩み出る必要はなかった」という物言いは重要である。一般に人間には継続的な安定性と未知の刺激性との両面を好むという相矛盾する性向があるが、標準的には前者あっての后者であろう。安穩に言えば、今まで通り暮らせればそれに越したことはないのであり、従前のライフスタイルを変更する必要がないのはとりあえずいいことなのである。

以上を要するに、歴史観区分とは、新規展開した最先端の部分を取り上げ続けて綴ったものであって、全人類が全過程を体験消化しなければならないといったものではない。この最先端的部分性の連続的採取は、地理観区分にも、地歴観区分にも当てはまることである。

（5）近代においてはじめて、社会は、二次的对象的媒介的なものとして立ち現われた。人々にとって、不可解なものになってしまったわけである。社会科学等として、その客観的法則性が探求されざるをえなくなったのは、そのゆえであった。

（6）私たちは、近代（文明）の圧倒的な威力、画期的な性格、隔絶した特質をもっと率直に認めるべきであろう。近代（文明）は‘one of them’ではない。西洋発近代とは、これまでのところわずかに南洋発前代のみが肩を並べるところの、巨大な地歴的一段階なのである。これに比べれば古代（的諸文明）など物の数ではない。前代の解体期にみられた諸革新性は、敢えて言えば<近代の先駆け>としての意味をもっていたにすぎなかった。これに対して、近代の爆発的な展開こそは、真に驚異的なことであり、文字通り刮目瞠目せざるをえない事態であった。近代こそが、人類史を画期するかたちで、真に歴史を生み出した。エネルギーを筆頭としてあらゆる事態事象の指数関数的な劇的上昇一つを想起するだけでも、それを肯んじざるをえないであろう。あるいは、古代の王侯貴族ですら持てずまたは使えなかったエアコンや飛行機等を、近現代の庶民が持ち使っていることを想起してもよいだろう。さらには、戦争や革命により千万・億単位で人が死ぬという事実を想起してもよいかもしれない。ともあれ、近代の大画期性に比べると、始代、古代、中世（等）の画期性は色褪せざるをえない。近代のものすごさを、凄みを正當に把握すべきゆえんである。〔図3〕

（7）なぜ西洋発近代は終わると言えるのだろうか。近代論、近代化論、現代論という三つのレベルで順次言うならば、社会的三主体が慢性的な過剰状態に立ち至ったからである、ソ連が解体することによって近代化の展開型が出尽くしたからである、社会的三主体にとって制御不能な社会外病理問題群が本格的に一齐に噴出し始めたからである、ということになる。なお近代論、近代化論、現代論については、拙著（平成10年）を参照されたい。（また本報告4の（3）も参照されたい。）

（8）「新代」という表現は、たとえば堺屋太一（平成4～5年）も用いている。

〔2．地理観について〕

地理観を思念する際の要諦は、二点ある。ひとつは、方位性を核として形式的に処理していくことである。人類はアウト・オブ・アフリカを経て、旧大陸（さらには全大陸）に広がった。これをアフロ・ユーラシア大陸中央部から四方に俯瞰するならば、概略、東西南北中という五方位に領域区分することが可能となろう。慣例を拡充するかたちで、これを五洋で表現しよう。このうち地歴的に重要なのは、南洋、西洋、東洋という三者であった。もうひとつは、温湿度を核とする自然地理的概念を内容的な基盤としてしっかりと位置づけていくことである。人文的および社会・国際関係的諸概念は、その上でさまざまに幹茂り花開く関係にある。^(1、2) [図4、5、6]

(1) 南洋(本家)

まず南洋は概ね熱帯(亜)乾燥系の気候にあり、地勢は陽性である。

対自然面では、なお依存性を第一義とするほかなかった。自然に対する<依存主義>である。自然には逆らえず、自然の掌の上でわずかに踊らせてもらうだけであった。ただし換言すれば、サバンナ等における生活は単調であるが、大概努力なしで生きられたものと思われる。薄い文化状態で済んだわけである。

南洋は前代の発祥地であり、その人文は他の地域に伝播した。<南洋人の世界展開>である。

近代においては西洋列強によって支配された。現在も概して低迷している。

具体的には主にいわゆる南側諸国に相当し、アフリカ東部を典型とする。⁽³⁾

(2) 西洋(分家)

つぎに西洋は概ね、かつては寒冷帯乾燥系の気候にあり、その自然は厳しかった。人々は相当に痛めつけられたであろう。その後弱温帯乾燥系の気候となり、自然は従順となった。(西亜・中亜等にも共通することであるが、)採集農耕だけでは生活を維持できず、狩猟牧畜に力を注がざるをえなかった。なおかつ人口支持力は弱かった。地勢は陰性である。⁽⁴⁾

対自然面では、独立性を第一義とするようになった。自然からの<独立主義>である。人為人工によって自然を征服・克服するという見地が優位となり、きわめて分厚い、強硬な文化・文明を構築した。人類は万物の霊長として君臨したわけである。

西洋は近代の発祥地であり、その人文は他の地域を積極的に支配した。<西洋列強による世界支配>である。現在も概して国際関係を牛耳っているが、もはや方向性を示し得ず、混迷しつつある。

具体的には主にいわゆる北側(特に旧西側)諸国に相当し、西欧を典型とし、アメリカを極致とする。⁽⁵⁾

(3) 東洋(新家)

そして東洋は概ね温帯湿潤系の気候にある。特に日本は温暖多雨にして、多様な気候に恵まれている。採集農耕で基本的に自足できたし、農耕期以降に関しても

セッション2：歴史に学ぶ未来学

6.松崎昇氏資料

米を主食とするので人口支持力は強い。地勢は陰陽兼ね備えている。

対自然面では、自然を補正し自然に調和するような生活をおくっている。自然的人間＝人間的自然という生活様式である。自然親和性を旨とするような、適度柔軟な文化・文明状態である。

東洋は新代の発祥地となるであろう。現在は生みの苦しみの状態にある。(6)

具体的には主にいわゆる大東亜諸国に相当し、日本を極致とする。(7)

〔注〕

(1) ここで<中洋、北洋>問題を論じておこう。五洋区分のなかで、私見によれば、北洋と中洋は大区分からは落ちる。

北洋とは、ロシアや北欧諸国を指す。特にロシアは、近代に入って陸伝いに超大国を作り上げたうえ、二十世紀に入るや近代を越えんとする壮大な試みを展開したが大失敗に終わった。<北洋発新代の試み>の大失敗である。遂に人類史の一主役たりえなかった次第である。北欧も、ノルマン(ワリヤーク)、ゲルマン(フランク、アングロサクソンを含む)の故郷であるとともに、かつて活性化し、今もなお実験的な先取的側面を有するが、独自の主役にはなりえなかった。ただし、ロシアや北欧は、西洋の一部分であるという属性ももつので、地理観のなかでは専らその側面において登場することになる。

中洋とは、小林元(松田壽男、207頁)や梅棹忠夫(平成2年)らによる概念で、東北アジアから南西アフリカまでを斜行する大乾燥地帯のことである。実に始代、古代はここから発した。およそメソポタミア・ペルシャから、スキタイ・匈奴を経て、アラブ、トルコ、モンゴル、女真に至るまで、この一万年余にわたる諸地域諸民族の興亡はほとんどすべてこの地歴的場面上において繰り広げられた。大活劇史地帯である。これを地歴観的に表現するならば、<中洋発始代>ならびに<中洋発古代>となる。しかしながら、両者ともに、残念ながら、地歴観上の大画期たりえなかった。

(2) 西洋系の論者は概して、自然環境が人間の社会・文化に及ぼす規定性・影響力を極力認めたくない。彼らの発想によれば、まさしく人間の自由意志によって、諸個人による試行錯誤の努力・変革的实践力によって、社会・文化は作り上げられるものなのであろう。

しかし、自然環境決定論は行き過ぎであるにせよ、自然環境が根本的基底的な規定性・影響力をもっていることは、素直に認めるべきであろう。

(3) 人類は熱帯(乾燥)産であり、とりもなおさず人類は黒人として発祥した。そして三洋分類は三人種分類にも照応する。高野信夫のすぐれた立論を参照されたい。

(4) 一般に、気候は変動を繰り返したであろう。わけても西洋の場合、居住地の(乾燥)寒冷化によって、全滅した部族部落等も随分とあったに違いない。南逃しても、その新地で先住者達と争わざるをえなかったであろう。西洋人の闘争指向的性格は、かつて自然に徹底的に痛めつけられたことによるものと思われる。

(5) 西洋は、具体的には<南欧、西欧、北欧、東欧、北米>として分けられる。このうち南欧は壮大な古代をもったし(<西洋古代>)、西欧こそは近代を切り開いた。(ここに<古西洋、現西洋>問題が生じるが、ここでは割愛したい。)さらにアメリカは<新西洋兼極西洋>として位置付けることができる。

(6) このような世界的課題を率先して切り拓ける国は日本をおいてほかにない。ただしそのためにはその前提として、日本の新生が必要である。現在の日本は瀕死の状態にある。未曾有の

セッション2：歴史に学ぶ未来学

6.松崎昇氏資料

危機である。それは人類に与えられた最大の試練であるとも言える。日本の凄みは、この人類史的危機を乗り越えざるをえない関係にあることにある。

(7)ここで東洋論を、時間軸区分と空間軸区分において、簡単に考察しておこう。インド・支那と日本との異同問題である。

まずは時間軸においては、<古東洋と新東洋>という区分ができる。インド・支那が前者に、日本が後者に相当する。

前二者は、既に紀元前にして驚異的に高度な文化を花開かせたし、豪華絢爛な古代大文明を築き上げて久しい(<東洋古代>)。で、近代に入るや、見る影もない。すなわち両者は、社会形態としても、社会を階層化させるかたちで、高度なシステムを長らく維持し続けた。だが、惜しむらくは、その後の発展がなかった。もちろんこれを逆に言えば、古代帝国システムに自足安住でき、それ以外(それ以上)の形態にわざわざ代わる必要がなかったのであろう。ともあれ、両者は、近代に至るまで、本質的に、古代的形態に終始した。それどころか、驚くべきことに、今日に至るまで、歴史的感覚は古代のまま止まってしまっている。たとえば支那など、古代支那帝国の赤裸々な覇権的野望を眼前に見るがごとしである。

それに対し日本は、その周縁部に遅れて成立した小文明圏であったが、近代に入るや急台頭し、今後こそを主導する関係にある。すなわち日本は、遅れて登場し、両者の思想制度文物を(主に唐から)選択過渡的に導入し、かろうじて古代を形成したのち、相対的に大きく離れ、日本中世を独自に構築した。しかもこれからこそ、日本発の時代が来るわけである。

ついで空間軸区分としては、<中東洋と極東洋>という区分ができる。

前二者は、中央アジアからすさまじい暴力の嵐を幾度も幾度も受け、大分中洋化してしまった。特に支那は、それにより、すなわち異民族による度重なる支配と民族(性)の重層的混交により、著しく劣化してしまった(Cf.魏晋南北朝、隋唐、宋、元、清)。

これに対して日本は、東海上の海洋大国として、日本は、東洋的なものを純一的に受け入れ守り育ててきた。(また両者は大陸性と列島海洋性との対比的関係としてもある。)

従来、たとえば日本と支那との根本的異質性を主張する論者が少なくない(梅棹忠夫「平行進化」や川勝平太「併行的「脱亜」」、西尾幹二)。だが他方で、さまざまな東洋的同一性がみられるのも厳然たる事実である。この異同性をどのように統合的に理解したらよいか。それは以上のような時空間的な異同性として統合的に処理すればよいのではないか。すなわちインド・支那が<古東洋兼中東洋>であるのに対して、日本は<新東洋兼極東洋>である。特に支那は(インドとともに)かつて東洋の本場たる性格をよく示したが、その後度重なる中洋の暴力を受け、相当程度中洋化してしまった。これに対して日本こそは専ら東洋としての粹に磨きをかけてきた。両者の異同に着目したい。(西洋の極致がアメリカであるのに対して)東洋の極致は日本なのである。

なお、さきの中央アジア(中央ユーラシア)については、たとえば岡田英弘が精力的に考察している。またここでは東南アジアの問題は割愛した。

〔3.総合的地歴観の提唱〕

地歴観の要諦は、人類の展開主導性の地歴的推移を理解するにある。これはいわゆる<正、反、合>の展開関係に相即しよう。(1)[図7]

(1) 南洋発前代(具体的特殊性)

まず南洋発前代は<過去指向的社會主義>を本質とする。やや具体的には<移動採狩活動、部族、集團想念>を特徴とし、<地域的多様性>をもつ。いわば、みなしごの群が、てんでんばらばらに育っていくようなものである。

すなわち南洋発前代人は、それ以前たる生物的自然に対してはそこから抜け出したことを誇示するが、それ以後たる西洋発近代人からみるならばなお自然環境に埋もれている。だからして、具体的には、自然環境の各種大変動につれて、さまざまな事態が生じたであろう。

そして社会文化活動は渾然一体としたかたちで行われた。前代社会はまず移動採集を基本的生業とするが、足りない分については狩猟も行った。もっとも狩猟の第一義は供犠であった。それは、人間が単なる動物から抜け出した証として、不可欠最重要な確認儀式であった。また小規模な部族を基本的な単位とするが、それはある程度伸縮自在であった。さらに胸心肺主導型の生活様式であり、人々は感覚感情的であった。だから小集団内・間で、情念の嵐が吹き荒れることにもなったであろう。そして一定の信仰行為が生活の基軸をなしていた。概して、保守志向をもっていた。全体として、必要以上に溜めることはなかった。社会維持の智恵としての相互贈与と消尽である。

地歴具体的には、1万年以上前のアフリカ東部を典型とする。その後、(定住農牧等による)始代、(都市国家等による)古代、(祭政分離等による)中世を経過するかたちで、解体していった。

(2) 西洋発近代(抽象的普遍性)

つぎに西洋発近代は<現在指向的個人主義>を本質とする。やや具体的には<定住産業活動、国家、科学技術>を特徴とし、<国際的画一性>をもつ。いわば、若者達が、知力にまかせて自己主張し激突しあうようなものである。

すなわち西洋発近代人は、自然環境から基本的に自由となり逆にそれを支配改造せんと努力している。そしてその変革努力は他者や自身にも及ぶ。その結果として、圧倒的な人為人工の世界を構築することになった。

ここでは経済領域、国家領域、意識領域が各々明確に独立した。そして<豊富主義、民主主義、自由主義>こそを善とする攻撃的なイデオロギーが繰り広げられた。彼らはまず産業のなかでも工業活動に重きをおき、大量生産を繰り広げた。資本主義的市場経済である。また大規模硬質な中央集権的統治機構を構築した。主権主義的行政国家である。さらに人々は知覚思考的であり、頭脳主導型の生活様式を構築した。すべてを対象化(=疑問視、敵視、分解)してやまない理性主義的コミュニケーション意識である。だから(屁)理屈の嵐が吹き荒れることにもなった。個々人の利害対立をなんとか食い止めるために、一神教が継続採用されもしている。概して、改革志向をもっていた。全体として、必死に溜めることを追求した。個々人の利益追求の具体態たる貯蓄・蓄積である。

地歴具体的には、19~20世紀の欧米列強、すなわち<19世紀中葉のイギリス、19~20世紀交のドイツ、20世紀中葉のソ連>を典型とする。現在は、西洋発近代の終了期にあり、事態は混迷の度を深めている。

〔3〕東洋発新代（具体的普遍性）

そして東洋発新代は＜未来指向的な個人的社会性＞を本質とする。やや具体的には＜多彩なサービス・ボランティア活動、世界連合を最大単位とする諸社会「編集」（今田高俊）、共存共生共志の自覚＞を特徴とし、＜世界的多様性＞をもつ。ここに初めて世界が形成される。いわば、バランス感覚に富んだ成熟者達が、軽やかに穏やかに生きるがごとしである。

すなわち東洋発新代人（真人）は、自然親和的であるとともに、自然補正的な生活態度をとるであろう。その親和・補正・和解姿勢は他者や自身にも及び、ひいては万事において親和補正和解的な新しい文明風景が切り拓かれるであろう。

ここでは自然を補正し社会に奉仕するような経済活動、世界と地域との双方に目配りするような国家活動、万物ならびに自己の存在理由（意味位置）を自覚するような意識活動が、相互連携的かつ抑制的になされるであろう。加えて＜諸企業を補足補正するものとしてのNPO、諸統治体を補足補正するものとしてのNGO、諸理論を補足補正するものとしてのNSO（非学校組織）＞もさまざまに生まれ活躍するであろう。意識活動に関してさらに言えば、肚腸主導型の生活様式であり、人々は氣概をもって意志的に生きるであろう。また自然・祖先・多神を穏やかに畏敬するであろう。概して、保守志向をもっていた。全体として、適当・好い加減・良い塩梅であろう。生活の智恵ないし規範としての中庸であり、さらに高めて言えば和である。特に、他の良きところを「ええとこどり」（堺屋太一）するという、選択透過的吸収同化という形式的な受容豊富化姿勢をもつ。

地歴具体的には、およそ24世紀以降の日本を筆頭とするであろう。（²）

〔注〕

（1）なおこの三者は＜静的安定性、動的激変性、動的安定性＞＜蕾、花、実＞＜助走離陸、飛躍即暴走、着地着陸＞といった対比的関係性においても特徴づけることができよう。

（2）東洋発新代論については、人間像、社会像、世界像等として、さらに考究していきたい。

〔4．総合的地歴観が含意するもの〕

ではこの総合的地歴観が含意するものを、幾点か確認していこう。

（1）二段階の独立運動から自覚的再帰運動へ

人間はこれまで二段階の独立＝自由化運動を繰り広げてきた。第一段階は生物的自然からの人間社会の独立であり、第二段階はその人間社会からの個々人の独立である。（ただし個々人は単独では生きられないので、二次的人工的な社会を構築した。これが近代社会である。）そして第一次独立運動が南洋発前代をもたらし、第二次独立運動は西洋発近代をもたらした。

この独立運動は理念的には既に目的を達成し、近代において独立自由な人間性が良くも悪くも全面開花した。これを踏まえ、今後、全存在への自覚的再帰運動が生

じることになる。〈人類登場、近代革命、新代維新〉という三段階推転である。(1)

換言しよう。さきの二段階独立運動をもって人類史が全面展開を遂げたと言うわけにはいかない。なぜならば、人類は、大枠においては〈自然と人類〉との対立を解決していないからであり、中枠においては〈社会と個人〉との対立を解決していないからである。その他もろもろの問題点は小枠的諸事態である。人類の地歴的展開はなお進行中であり、まだ途中経過にある。それには〈このあと〉がくるほかない。[図8、9]

(2) 対立関係から含越関係へ

地歴観上の三者の関係をさらに、立ち入って考察してみよう。南洋発前代と西洋発近代とは発展的対立関係にあった。これに対して西洋発近代と東洋発新代とは対立関係にはない。東洋発新代は統合包摂力をもつ。つまり第二段階は気負って第一段階を(意識的には)否定したが、第三段階は第二段階を否定しない。そうではなくて第一・第二の両段階を受け継ぎ踏まえつつ、越え出る。すなわち東洋発新代は、南洋発前代を参照しつつ、西洋発近代を自覚的に卒業する。卒業とは含越であり、決して否定・革命することではない。受け継ぎつつ、いわば画期的にヴァージョンアップすることである。[図10、11]

(3) 西洋発近代の意義と限界

さいごに、私たちにとっての現場たる西洋発近代について、その意義と限界を簡単に論じておこう。西洋発近代は世界史的に不可避不可欠な生活様式であった。それはたいへんに激しく刺激に満ちた時代であり、その意義ないし成果もきわめて大きかったが、近年その限界も明らかになってきた。メリットとしての〈豊富性、民主性、自由性〉、およびデメリットとしての〈浪費性、衆愚性、勝手性〉である。メリットは巨大であったが、近年になるとデメリットも看過しえなくなっている。近未来においてはデメリットが圧倒的な姿をとって私たちにのしかかってくるであろう。それが、デメリットの現代的本格的現出形態たる〈双極六相の社会外病理問題群〉の同時的噴出である。[図12、表3]

それゆえ私たちは今や西洋発近代を卒業し、東洋発新代の招来にいそむほかない。

〔注〕

(1) たとえばJ. ハバマスは、(個々人の自由の実現を旨とする)近代はなお未完成であると述べている。しかしながら私達は、既にそれは実現されたと考えている。もはや問題は〈その後〉に移っている。ただし、いわゆるポストモダン論(ポストモダニズム論)はこの点を明確には把握しておらず、採り難い。むしろ、たとえば心理学におけるトランスパーソナル理論に、興味深いものがある。これは、個人主義の果てに、「個人を越えて」という地平を見つめようとする

ものである。

【おわりに 三戒・自戒】

さいごに、本学会へのコメント、および未来論考察に際しての一般的な留意点を、僭越ながら、記しておきたい。

(1) 技術・工学的見地に偏していないか。

技術・工学的知見は一小部分であることを自覚したい。技術工学主義は危ういし、人為人工をひたすら良しとする知見も危険である。人文的総合的見地こそが本流であり、締め括りでなければならない。

(2) 未来主義・設計主義に陥っていないか。

温故知新をモットーとすべきであり、過去・現在を踏まえ生かすべきである。過去を軽視無視否定し、未来に理想・夢をひたすら投射投入することは危険である。

革命主義・理性主義はきわめて危険である。換言すれば、未来を美化・神化してはならない。実際界に100%、100点満点は未来永劫ありえない。

なる(くる)とする(うみだす、つくる)との関係を、具体的に詰めて考えていく必要がある。(1)

(3) 悲観主義・楽観主義は、おそらくともに採れないだろう。

徒らに悲観することなく、かと言って安易に楽観することもなく、意欲をもって淡々と、考察・推論を進めていきたいものである。

【注】

(1) これは地歴観上の<必然性・蓋然性・偶然性>の問題(やや具体的には<歴史的必然性と実践的変革性><法則性と自由性><環境的受動性と主体的能動性>等々の相互関係問題)にかかわる。さらには未来予測不能論にもかかわってくる。すなわち「未来とは定義上、未だ来たらず知られない無数きわまりない複雑な諸要素から成るのだからして、予測することなんかともとできない、未来論など不遜無用である!」という批判の矢が存在しよう。未来論・学はこの問題を基本的にクリアしておかなければならないだろう。

【参考文献】

- 伊東俊太郎 『比較文明』 東京大学出版会、昭和60年
今田高俊 『混沌の力』 講談社、平成6年
上山春平 『歴史分析の方法』 三一書房、昭和37年

セッション2：歴史に学ぶ未来学

6.松崎昇氏資料

- 梅棹忠夫 『文明の生態史観』中央公論社、昭和49年
同 『梅棹忠夫著作集』第4巻、中央公論社、平成2年
同 『情報の文明学』中央公論新社、平成11年
岡田英弘 『世界史の誕生』筑摩書房、平成4年
川勝平太 『文明の海洋史観』中央公論社、平成9年
川喜田二郎 『素朴と文明』講談社、平成元年
堺屋太一 『風と炎と』全4冊、扶桑社、平成4～5年
同 『世は自尊好縁』日本経済新聞社、平成6年
鯖田豊之 『肉食の思想』講談社、昭和41年
鈴木秀夫 『森林の思考・砂漠の思考』日本放送出版協会、昭和53年
高島俊男 『本が好き 悪口言うのはもっと好き』大和書房、平成7年
高野信夫 『黒人 白人 黄色人』三一書房、昭和52年
富永健一 『近代化の理論』講談社、平成8年
西尾幹二 『国民の歴史』産経新聞ニュースサービス、平成11年
西田正規 『定住革命』新曜社、昭和61年
松田壽男 『アジアの歴史』岩波書店、平成4年
村上泰亮 『文明の多系史観』中央公論社、平成10年
安田喜憲 『森を守る文明・支配する文明』PHP研究所、平成9年
和辻哲郎 『風土』岩波書店、昭和54年
拙 著 『西洋発近代の論理 社会科学の方法と体系 - 』社会評論社、平成10年
同 『西洋発近代からの卒業 総合的地歴観の提唱 - 』慧文社、平成17年
Habermas, J., Die Moderne – ein unvollendetes Projekt, ins *Kleine Politische Schriften*, 1 - 4, 1981
(三島憲一編訳 『近代 未完のプロジェクト』岩波書店、2000年、)
Melko, M., 'Mainstream Civilizations', in "Comparative Civilizations Review" No. 44, 2001.
Toffler, A., *The Third Wave*, 1980 (徳岡孝夫監訳 『第三の波』中央公論社、1982年)
Toynbee, A., *A Study of history*, 1972 (桑原武夫ほか訳 『図説 歴史の研究』学習研究社、1975年)